

うので大変なんだ。ちょっとした所に休んでいると、椅子を持って来てくれる。夏の盛りだったから、水も持って来てくれる」「フィルムを変えるのでチェンヂ・バックに手をつこんで、上に外套をかけてやっていると、おかげが悪いのですか、お医者様を呼びましょうか、などとも云う。実際渡る世間に鬼はないね」と振り返っている。

森鷗外の娘の小堀杏奴が終戦直後に市川に住む長井荷風の家を訪ねている、「其の日私達は日暮里から京成電車に乗ったのだが、直ぐ或る感じに打たれた。それは曇った美しい日で、電車は荒川の流れや、夏草の生茂った土手を見下ろす鉄橋を走り、方々に煙突のある工場、汚い黒ずんだ小家が、狭い溝や掘割に沿って点々とし（略）そればかりではない。電車に乗っている人種に、いわゆる intellectuel な感じの人が一人もいないのである。」

「そうでしょうか？あの線にはほとんどインテリらしい人は乗りません。朝や夕方、学生や勤人が少し乗るくらいで」と荷風。

そうなのか、この辺りはスラム街なのかと今さらながら気づく分けです、大正時代に荒川放水路の開削工事に駆り出された大勢の人足達が棲みついて、そんな上品な輩など居るはずもなく街にはモツ焼きとチューハイの店が増殖する。

『ガラスの中の少女』1960年、では浜田光夫が働く堀切のおもちゃ工場に近い低湿地と擲揄されるゴミで汚濁した沼の淵を歩いて吉永小百合の住む生垣に囲まれた高級住宅街との格差を際立たせる。

“東京の貧民窟のドブ川から、行李づめの変死体が発見された”

『警視庁物語 自供』1964年、公開当時に作品に付された解説は辛辣だ、当時立石にあった血液銀行でロケが行われて売血をその日の稼ぎにする人達が描かれている、貧しさは犯罪の温床であったり、生きて行くのがやっとの生活は、悪い意味でさぞかし毎日がドラマチックだったに違いない、それが虚構ではなく現実で起きていた地域だ、映画の舞台として相応しかったであろうことが理解できる。

流石に近年はスラム感も薄められて、映画に描かれる地元の捉え方も変わってきました、更に再開発の波が街を小綺麗にしてしまっ、人々が暮らしやすくなることは喜ぶべきなのですが、どこの町とも区別がつかない平均的な景色になってしまっ、もはや画になるのは観光用の創られた風景であったりと、ロケ地として生かされることが段々と難しくなっています。

特別ではない、この地で人々がしっかりと手入れしながら培ってきたものが想像力を後押しするような映画の素材として役立てられるのが理想でしょうか。

東京湾

左きぎの狙撃者

監督 野村芳太郎 「張口の焦点」
企画 佐田啓二 企画才一回

友情を引き裂く銃声！
追う者、追われる者の凄まじいサスペンス！

製作補 六車進
撮影 川又昂
脚本 多賀祥介
脚本 松山善三
製作 白井昌夫
西村晃
高橋とよ
加藤嘉
織田政雄
細川俊夫
玉川伊佐夫
三井弘次
葵京子
神ひろみ
石崎二郎 (入社才一回)

松竹映画

堀切名画座

映画の申し子 野村芳太郎

日本映画の草分け的存在で松竹蒲田撮影所の所長も務めた野村芳亭を父に持ち、幼い頃より撮影所に入出入りして小さなディレクターチェアをあつらえて父親の隣に座っていたという根っからの映画人で、大学を卒業すると当然のように松竹大船撮影所に入社する。

会社の企画に沿った作品を予算と製作期間を守って効率よく興行収入を上げる作品を作る、黒澤明の様にこねることもなくヌーヴェル・ヴァーグなどと小難しい能書きをこねることもない会社にとっては全く都合のいい、多くは低予算の批評家の箸に掛かることもないようなコメディ、時代劇、ホームドラマなど娯楽映画を2ヶ月に1本のペースで作る有能な職人監督でした。

初めてその卓越した個性を見せたのは松本清張原作の『張込み』1958年で静かな緊張感を見事に映像化して注目を浴びたことで、この頃出合った脚本家の橋本忍と撮影監督の川又昂との才能の結びつきが後年の大作『砂の器』1974年へとつながる。

その後も『ゼロの焦点』1961年の成功でショッキングな描写を伴う社会派的色彩の強いサスペンスを数多く撮るようになり、それまで純情な娘役ばかりだった岩下志麻を『五辨の椿』で演技派に成長させるなど目覚ましい活躍を続け1960年代から日本映画界を襲った不況もものともせずヒットメーカーとして脂の乗った活躍を続ける。

立石を舞台に作られた名作

きっかけは「そろそろ、今までにやらなかったような役をやったらどうかな…」という多賀祥介の言葉に佐田啓二が興味を示したことだった。松竹を代表する俳優だった佐田は俳優だけでは飽き足らなかったのか、企画、プロデュースにも足を踏み入れていた。多賀がオリジナル・ストーリーを書いて佐田に見せると大変気に入って、会社へ出す



カメラをのぞく松本清張、後ろに野村芳太郎と川又昂、現在山田組で活躍する近森真史はまだピントマンだった。



企画の佐田啓二、中井貴一のお父さん。

に反対だったからだ。捜査に忙しく、家庭を顧みない自分を投影してしまうからだった。捜査線上に、澄川の戦友で、戦場で澄川の命を救った井上が浮かび上がってきた。彼は左利きの秀でた狙撃兵だった…。

作品情報

『東京湾』1962年5月27日公開

製作＝松竹（大船撮影所）83分 白黒 シネマスコープ

公開時のタイトルは『東京湾』でしたがリバイバル上映に際しては“左ききの狙撃者”というサブタイトルが付くこともある、フィルムは変更なし。

キャスト：石崎二郎、榊ひろみ、葵京子、西村晃、玉川伊佐夫、三井弘次

スタッフ：企画 佐田啓二、監督 野村芳太郎、脚本 松山善三、多賀祥介、撮影 川又昂、音楽 芥川也寸志

主なるロケ地：日本橋高島屋付近、立石、新小岩、洲崎、西新井橋、尾道、西瑞江、荒川突堤、夢の島、押上駅付近、浅草、朝比奈峠、警視庁、築地警察署、大船駅構内の大船工場引込線、馬入川橋梁。

幻の場面

シーン117 星空の下の堤：戦場で生きながらえた澄川と井上が日本に帰る希望を語り“夕空晴れて 秋風吹き”と唄う。

シーン118 おでん屋「千成」の中：“思えば遠し 故郷の空”命の恩人を逮捕しなければならぬ苦しみに葛藤し酔いつぶれる。

おでん屋の女将水木涼子で撮影されましたがカットされました。

Goofs

撮影助手の高羽哲夫がタイトルバックでは高場哲夫となっています、1948年から松竹でカメラひとすじ汗を流していたというのに。

葛飾区で映画を撮るとのこと

葛飾区で一番最初にロケが行われたのは『綴方教室』1938年でしょう、本田小学校時代の作文が80万部ものベストセラーになって、原作者豊田正子の住む東四つ木の長屋で撮影されました。

製作主任として現場を取り仕切った黒澤明は、豊田一家周辺の貧しい生活を赤裸々に映し出そうとするロケについて、「どんな目に遭うか分からないと思ったが、これがそうじゃない。自分達の住んで居る所を映画に撮ってくれるとい

がないとつっぱねられ、佐田啓二がポケットマネーで草月会館で試写会を開催してくれた。

公開1週間前にTV番組「スター千一夜」で取り上げてくれて佐田啓二、石崎二郎、野村芳太郎が出演して作品の見せ場を語った。



どこか哀愁を漂わせるおぼけ煙突の映像、そして澄川の住まいの近所にはトロリーバスの車庫と昭和な趣き。

佐田啓二はこの2年後の1964年に交通事故で37歳の若さで急逝したため、『東京湾』は佐田にとって、唯一の企画作品となってしまった、誰よりもこの『東京湾』のヒットを喜び次の構想を語っていた時でした。

川又昂が『東京湾』『からみ合い』『裸体』の3作により1962年度の最優秀撮影者としてNHK映画賞特別賞を受賞した(12月13日)

“東京湾”の方は、話の弱さを、無理にカメラ・ワークでカバーしたようなところもあって——野村芳太郎。

公開から60年程経った作品ですが今でも数年ごとに名画座でリバイバル上映され、その度に観客全員が固唾を呑み映画館全体がピンと張り詰めたような緊張感で終わるとホーッと大きな溜息のでる作品である。

あらすじ

最近荒川地区に根を張り始めた麻薬団の運転手が都心で駐車中に射殺された。狙撃場所はビル9階のバルコニー、銃弾の角度から犯人は左利きの男と判断された。捜査一課の澄川刑事が捜査に当たることになった。相棒が、彼の妹の恋人である秋根刑事だと聞いた時、澄川は、顔をしかめた。彼は妹と秋根の結婚

と企画もすんなりと通り、サスペンスなら野村芳太郎監督が良いだろうと、野村監督は他の監督が面倒くさがるそうしたスターの映画企画、製作も受け入れ、



都会とは違う立石の街の雰囲気ガロケ地として最適だった。

応援する柔軟さを持っていた。監督に見せると、なんとかなるだろう、と言ってくれた、その時のタイトルは『狙撃者』だった。

多賀は野村監督の住まいの近くの旅館に籠って監督の指導を受けながら初めての脚本をなんとか書き上げる、翌年の秋になっていた。タイトルは『東京湾』となっていた。

出来上がった脚本では大井町から羽田付近を舞台に設定されていたのだが、東京オリンピックを控え高度成長時代の掛け声と共に東京の街が大きく変容し大井町も今日ではかなり近代化されていて、以前『張込み』の血液銀行ロケで行った立石辺りが良いのではということになる。



助監督として参加していた山田洋次がヤジ馬役で映ってる、タイトルバックには名前が出ないが既に脚本の才能を見込まれ監督の右腕的存在になっていた。

正月3日からの撮影で最低でも40日予備も入れて60日を予定して撮影計画を組む。相手役に決まっていた池部良が出られなくなって、それではドラマにならない、との監督の意見もあって、ノースター、ドキュメントタッチに路線変更ということになった。

それに伴い低予算体制に移行してセット撮影をほとんど排してセミ・ドキュメンタリーの手法をとり俳優にメーカーキャップをさせず、スタッフ17人編成でカメラはハンディなアリフレックスによる手持ちで盗み撮りを徹底させ、素人をそのまま

使って台詞をしゃべらせる、通行人に気づかれぬためスタッフのスタイルを映画屋然としたものから、ごくありふれた姿にするという、前例のないスタッフの衣装合わせもやってのけた。大船に組んだセットは湖月店内、特別捜査官本部だけで映像にして3分程と文字通りオールロケ。昨年暮れからロケハンを続けてきた川又カメラマンは、「松竹映画に登場するのはめずらしい土地だが、なにかムンムンしている感じだ。おもしろいことができるような気がしますね」と語る。



事件の現場となる路地、今でも変わらないのは星菊水だけだろうか。

脚本を元にしたシナリオ打ち合わせにたまたま参加していた西村晃がクライマックスの逮捕シーンを提案してくれて、ならばとキャストに加わってもらうことになった、いずれ良い仕事をするようになるであろう俳優達もまだ無名で佐藤慶に至ってはポスターに名前すら出なかった、新人の石崎二郎は劇団四季に所属していて演技には実績があった、父親の佐分利信は「まだ早い」と渋っていたが佐田啓二の熱心な薦めもあり主役扱いで新人刑事の役はデビュー作に相応しい。



立石での撮影シーン車椅子を引く撮影助手の高羽哲夫（後に男はつらいよシリーズを撮ることになる）。

クランクインは富士見荘のシーン、スタッフが車や電車で三々五々新小岩駅前に集まって現場のアパートに移動、ロケバスも無いので全く目立たなくて見物人も皆無、帰り道の八百屋の店先

の赤電話を借りて捜査本部に連絡のシーンを撮り、わきの道で自然音を入れながら短いセリフのアフレコを行なった。

主舞台となる立石の呑み屋“湖月”とマージャン屋は車も入らない細い路地で上手い具合にはず向かいの位置にあって、“しののめ”という小料理屋の看板だけを付け替えて舞台に仕立て上げた、更に幸いなことに隣が映画館でさりげなく『喜劇 団地親分』『春の山脈』『からみ合い』と松竹作品の看板を画面に映し込むことも出来ました、ほど好い場末感が漂うここは川又カメラマンが2ヶ月間をついやして探したところ、600ミリのレンズで離れて撮っていると誰も気づかず立石の住民も自然に写り込んでいる。移動撮影はレールを敷かず近所の小方病院から患者の乗る車椅子を借りてきてカメラを構えて乗り助手に押したり引いたりして貰う、軽量のアリフレックスならではの可能な手法だ。



かつての撮影現場、映画館の跡は児童公園になっている。

ヤマ場であるラストの列車シーンは、大船駅構内の大船工場引込線、列車は電気機関車につないだ客車3両。50キロのスピードでカメラの川又昂は窓に足を掛け腰をロープで結んで、ライトマンは更に身を乗り出す、あまりにも危険なので松竹でもさすがにカメラマンには保険を掛けてくれた、夜半やっと撮り終わった時はみんな傷だらけになっていた。

撮影は予想外に順調に進み実質37日で上がった、改めてベテラン俳優の実力を実感することになる「楽しい仕事だった」と監督自ら語っています。

公開をひかえ、そこは佐田啓二の企画と言うことで新聞各紙も取り上げてくれて、これは当たるという手応えを感じもうひと押しと会社に要請したが予算